
ダンスの中の宇宙

クルクルココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タンスの中の宇宙

【Nコード】

N5271U

【作者名】

クルクルココロ

【あらすじ】

就職先が決まったシヨウタは実家へと帰ってくる。

自室で物思いに耽っていると、古びたタンスが目に入った。タンスの引き出しを開くとそこには……。

(前書き)

是非、縦書きにして読んでみてください。

「お母さんただいま」

僕は玄関で家の中に向かって挨拶をした。

「おかえりシヨウタ」

母が居間から現れた。

「今日はご馳走よ。楽しみにしててね」

「そんな気を使わなくてもよかったのに」

「何言ってるのよ。シヨウタの就職祝いなんだから甘んじてお母さんの好意を受け取りなさい」

お母さんはそう言っ居間へと戻った。僕はしゃがみ込んで靴紐をほどいた。

自分の部屋に入ると懐かしい匂いが僕を包み込んだ。窓にはカーテンがかけられているが、小さな隙間から光がかすかに差し込んでいる。僕は窓に近づきカーテンを開けた。

目の前に乳白色の壁が現れた。僕の実家の隣には二年前に集合住宅が建てられてしまったことを母から事前に聞いてはいたものの、実際に見てみると結構な圧迫感がある。

僕はカーテンを閉じた。部屋の中が途端に暗くなる。部屋の中央に垂れ下がっている紐を引っ張るとチカチカという音がして蛍光灯が光り始めた。

人工的な光に照らされて部屋の中の家具たちがその輝きを取り戻し始めた。小、中、高とずっと使っていた少し大きめの勉強机。こいつは部屋の中で最も大きな体積を占めている。大学受験前、僕は血眼になって参考書をこの机の上で読み耽ったものだ。勉強机の本棚には参考書、教科書類が寂しげに取り残されていた。僕はそこから国語の教科書を手を取った。

作者紹介の写真に落書きがしてあるのを見つけた僕は思わず吹き出してしまった。どうやら高校時代の僕には笑いのセンスが備わっ

ていたようだ。

教科書をもとあった場所に戻し、僕は再び部屋の中を見回した。ふと大きな古びたタンスが目に入った。はて、僕の部屋にあんなタンスはあっただろうか。

タンスの引き出しを開けると、中には学生服が入っていた。懐かしい。僕の中学時代に着ていた学生服だ。僕はタンスから学生服一式を取り出して引き出しを閉めた。

僕は思い切って自分の服を脱ぎ学生服に着替えてみた。不思議と窮屈さを感じない。着れる。嘘だろ。どうして中学時代の学生服が着れるんだ。僕はつい先日大学を卒業して社会人になったはずだ。就職先も大手商社に決まっていたし、僕は一人の立派な大人になったはずではなかったか。これからの新社会人生活に憧れを抱いて、スーツも新調したし、住まいも少し高級感のあるマンションに変えた。そんな僕がどうして中学時代の学生服を着ることができるのだ。僕は急に巨大な不安感に襲われた。

「シヨウタ！何してるの！」

階下から母の怒鳴り声が聞こえた。ちょっと待て。この怒鳴り声には聞き覚えがあるぞ。何だっただろうか。

「早く起きなさい！遅刻するわよ！」

思い出した。僕は中学時代いつもこんなふうにして母に起こされていたっけ。僕は姿見の前に自分の姿を映してみた。僕だ。髪の毛は丸坊主で顔は日に焼けて赤黒く焼け焦げている。そう、僕は中学時代野球部に所属していたんだ。

「朝ごはん食べる時間なくなっちゃわよ！早く降りて来なさい！」僕は母がうるさいので階下に下りることにした。

居間に入ると、台所で母が忙しそうに冷蔵庫を開けたり、流しのところで野菜を切ったり、コンロの前で目玉焼きの焼き加減を見たりしていた。

「遅いじゃない！早く食べなさい！」

母は台所を走り回りながら僕に朝ごはんを食べるように催促した。

僕は食卓に座って朝ごはんが出てくるのを待った。母は相変わらず台所をあっちへ行ったりこっちへ行ったりしている。野菜を切つて、コンロの火を調節して、冷蔵庫の中を確認して、また野菜を切つて、コンロの火を調節して……。

その光景を見ていた僕は段々と目が回ってきてしまった。一向に朝ごはんが僕の前に出てくる気配はない。母は同じところをぐるぐる回っている。

「お母さん、僕あまりお腹空いていないし、もう学校へ行くよ」

そう言つて僕は居間を出て玄関へと向かった。

「気をつけて行ってらっしゃい！」

台所から母の声が聞こえた。僕はスニーカーの紐を結んで外に出た。

「シヨウタおせーよ。もう十分も待つていたんだぜ」

そこにはケイが立っていた。僕はケイに遅れたことを謝った。

ケイは学校に歩き始めた。僕もケイに遅れないよう一緒になつて歩いた。

登校している途中にケイは急に話し始めた。

「学校つて面倒臭くないか」

あまりにも急だったので僕はしばらく考え込んでしまった。考え込んでいるとケイはまた話し始めた。

「ずーっと登校していられたらいいのにな」

ケイはそう言つてまた歩き出した。僕はその言葉の意味を考えた。登校し続けていたらそれはそれで疲れるだけだし、そのほうが学校にいることよりも面倒臭いような気がした。

かれこれ一時間は歩いただろうか。全く学校に着く気配がない。

僕はさすがに歩くことに飽きてきたのでケイと一緒に歩くことをやめ、その場に立ち止まった。

「おい、シヨウタ、一緒に学校に行こうぜ」

ケイは僕にそう呼びかけた。

「いや、足が痛くなつてきたんだ。どうやら一緒に行けそうにない。

先に一人で行ってくれ」

僕がそう言うのとケイは分かったと一言残し、一人で歩き始め、角を曲がって見えなくなってしまった。

僕はしばらくその場で立ち止まっていたが、学校に行かなければならないことを思い出して再び歩き出した。

十分も歩くと学校の校門が見えてきた。たくさん生徒が僕と同じように登校している。だが、その中にケイの姿はなかった。

教室に着いて自分の席に座っていると教室前方の扉がガラガラと音を立てて開き、国語の教師が現れた。先生は生徒たちに向かって挨拶をすると早速国語の授業を始めた。今日は教科書40ページの走れメロスを学習するらしい。出席番号順に朗読が始まった。

邪知暴虐の王が、メロスとセリヌンティウスの熱い友情に心打たれて、罪を許し、物語はハッピーエンドを迎えた。先生は生徒に感想を求めた。ところが生徒は誰一人として挙手しない。先生が困ったような顔をして、仕方ない、もう一回読みましようと言いだした。かくして、僕たち生徒はまた走れメロスを出席番号順に読み始めた。感動的なラストを迎え、走れメロスは二度目の幕を閉じた。先生が生徒に感想を求める。誰も手を上げる気配がないので、仕方なく僕が感想を述べることにした。

「先生、この話は都合がよすぎる気がします」

僕がそう感想を述べると先生はまた困った表情を浮かべた。

「シヨウタ、小説というのはそういうものだよ」

先生はそう言って、もう一度走れメロスを朗読するように出席番号一番の青木に指示を出した。青木は朗読を始めた。メロスは激怒した。必ずかの邪知暴虐の王をうんぬんかんぬん……。

僕は走れメロスを読むことに飽きてしまったため、席を立ち教室を出た。

「シヨウタ！どこ行くんた！まだ走れメロスは読み終わっていないぞ！」

後ろから先生の怒鳴り声が聞こえたが、僕は気にせず学校の外へ

と向かった。

グラウンドでは野球部が練習をしていた。カキンという軽快な打球音とパシツという重厚な捕球音がグラウンド中に響いていた。

「何そんなところに突っ立ってるんだ。早く守備につけ」

監督が僕にそう言っただけでライトの守備につくように命令した。監督の命令に逆らうとろくなことになるのを知っていた僕はそそくさとライトについた。

監督がノックを始めた。ファースト、セカンド、ショート、サード、センター、レフト、ファースト、セカンド、ショート……。守備についている選手たちは一球もエラーすることなく確実に捕球を重ねていく。僕はその光景をライトに突っ立ってずっと見ていた。

ボールが一切飛んでこないのも野球に飽きてしまった僕は、監督に頭がくらくらします、熱中症かもしれないと言っただけで練習を抜けさせてもらった。ところが監督は、それは危険だと急に慌てだして保健室に無理やり連れて行かれた。余計なことを言ってしまったなと思っていると、ほどなくして保健室に着いた。

「あら、どこをケガしたの」

保健室に入るや否や、保健の先生にケガの場所を尋ねられた。

「熱中症です」

僕がそう言っただけで保健の先生は大慌てで救急箱をあさりだした。そして、中からあるものを取り出した。

「熱中症はとても危険よ！今すぐぐるぐる巻きにしなきゃ！」

救急箱から包帯を取り出した保健の先生は、まず僕の腕を取り、指先から丁寧に包帯を巻き始めた。ぐるぐると包帯を巻き上げていき、肘まで僕の左腕はミイラみたいになった。

「先生、僕熱中症なんですけど」

「分かってるわ。でも、私はあなたの体を包帯でぐるぐる巻きにするのが仕事なの」

そう言っただけで先生は包帯を僕の腕に巻き続ける。

とつとつ左肩までできてしまった。

「先生、熱中症が治りました」

「あら、よかったわ」

そう言つて先生は包帯を巻くのをやめ、僕の腕に巻きついてい
る包帯をほどきだした。

「私の応急処置のおかげね」

保健の先生は包帯を救急箱に戻すとにこりと笑つた。

「先生、みんなの様子がおかしいんです。みんな同じことを繰り返
しているんです。みんなどうしてしまつたのでしょうか」

保健の先生は僕がそう言つと急に包帯を片付ける手をやめ、僕の
目を見た。

「ウソでしょ。・・・今、あなた何て言つた」

「みんなの様子がおかしいんですと言いました」

「大変！あの病気だわ！」

保健の先生は大慌てで救急箱からまた包帯を取り出した。

「今すぐ治さないとみんなにうつつてしまつ！」

先生は僕の手を強く握つた。身の危険を感じた僕は、とつさにそ
の手を振りほどいた。

「今すぐ治療が必要なの！おとなしくしなさい！」

保健の先生は必死で僕の腕を掴もうとする。僕は椅子から立ち上
がり保健室から出ようとした。扉まで行くと、保健室のベッドが見
えた。今までは仕切り用のカーテンに隠れて見えなかつたのだが、
誰かが寝ている。全身が真っ白い何かにくるまれていて・・・
、包帯だ。彼は全身を包帯でぐるぐる巻きにされている。体だけで
はなく、頭、顔まで全て包帯できつく締め付けられている。一体あ
の子は何故あんなことになっているんだ。あの子は一体・・・
「見たわね。あの子はあなたと同じ病気にかかつたの」

保健の先生が話し始めた。

「飽病よ。同じことを繰り返し返すことができなくなる病。同じもの
を繰り返し享受することができなくなる病。愚直に世界を受け入れ

ることができなくなる病。この病気はね、とても恐ろしい病なの。一度発症してしまつたら最後。二度と完治することはない。唯一の治療法は包帯でぐるぐる巻きにしてしまうこと。これ以外には有効な治療法はないの。さあ、おとなしく私の言うことを聞きなさい」保健の先生は僕に近づいてくる。

「そんなの病気じゃない！だって、物事に飽きるのは当然じゃないか！」

僕は大声で叫んだ。

「どうやらもう手遅れのようなね。患部治療ではあなたを救うことはできないわ。全身治療で何とか感染を防がないと」

僕は保健室の扉を開け外に出た。すぐさま扉を閉じる。

「こら！開けなさい！あなたには治療が必要なの！飽病はとても危険な病なの！さあ！おとなしくぐるぐる巻きになりなさい！」

保健の先生がガタガタと扉を開けようと向こう側で力を込めている。僕も負けじと力強く扉を閉める。

「僕の何がおかしいと言うんですか！僕はいたって普通ですよ！」

僕が叫ぶと、先生は扉から力を抜いたようだった。

「あなた、就職先が決まつたでしょう」

「就職先？何のことですか？」

「黙って聞きなさい。あなたは就職先が決まつて実家に意気揚々と帰つてきた」

「.....」

「あなたは新社会人生活に憧れを抱いていた」

「先生、なんだか頭が痛いです。やめてください」

「あなた、何か勘違いしてるわよ。新生活なんてないの。あるのは今までと同じ生活よ」

「やめて.....」

「今までと同じく生きるために働き、生きるために食べ、生きるために遊び、生きるために悲しみ、生きるために喜び、そして、生きるために生きるの」

「そんなの嫌だ……」

「いいえ、嫌でも生きなければならぬの。もし嫌ならば今すぐに私があなただを包帯でぐるぐる巻きにしてあげるわ」

「それも嫌です……。まだ死にたくない……」

「ならば同じことを繰り返さない。毎日毎日同じことをするのよ。平日には会社に行き、休日には遊び、そして、また平日には会社に行くの。あなたはそれに耐えられるだけの覚悟があるかしら。もしないのであればそれは飽病よ」

「うう……。先生、僕、家に帰ります」

「そう。それは覚悟ができたということかしら」

「そういうことにしておいてください」

「分かったわ。どちらにせよ、あなたは同じことを繰り返さなければいけない。永遠にこの袋小路からは抜け出せないのよ」

先生はそう言うつと扉から手を離し、部屋の奥へと歩いていったようだった。安心した僕は保健室を離れ生徒玄関へと向かった。

生徒玄関についた僕は下駄箱からスニーカーを取り出し、地面に置き、右足をスニーカーの中へと入れた。

「ようシヨウタ。学校サボってどこ行く気だ」

顔を上げるとケイが立っていた。

「家に帰るんだ」

「家？お前、まさかあのつまらない世界に戻るつもりなのか」

「つまらない世界？」

「おれはこつちの世界の住人だから、あつちの世界のことはよく知らない。でも、あつちの世界はつまらない世界だぜ。だって、あつちの世界の住人はみんな飽病だろ」

「思い出せないんだ、ごめん」

「寂しいな。お前が行つちまったら、オレは一人で登校し続けなきゃいけないもんな」

「また戻ってくるよ」

「約束だぜ」

そう言うとケイは校舎の中へと入っていった。彼はこれから授業を受けるのだろう。走れメロスを朗読しに行ったのだ。僕は何故かもの悲しい気分になった。

家に辿り着いた僕は、自分の部屋へと向かった。台所からは相変わらず母のドタドタと走り回る足音が聞こえてくる。

僕の部屋には予想通り古びたタンスがあった。僕はそのタンスの上から三番目の引き出しを開けた。中にはブレザーが入っていた。少し違和感を感じた僕であったが、タンスからブレザーを取り出し、ブレザーに着替えた。

鏡の前に立ってみると僕の髪の毛は坊主ではなくなっていた。ブレザーの左胸にはワッペンがついている。何だこれは。僕は社会人に戻ったはずじゃないのか。それにこの顔のニキビは何だ。こんなにニキビなどあっただろうか。

「シヨウタ！何やってるの！高校生にもなってまだ一人で起きられないの！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5271u/>

タンスの中の宇宙

2011年7月14日03時27分発行